都道府県番号	
都道府県名	長野県

【 ①□ ②☑ ③□ 】

Ⅰ　学校名及び規模

学校名	松本市立清水中学校					
学　年	１　年	２　年	３　年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	３	４	２	１３	２０
生徒数	１２１	１１７	１２７	７	３７２	

Ⅱ　研究の概要

（１）研究主題

自己学習力を育てる授業の創造

（２）研究主題設定の趣旨

昨年度よりフロンティアスクールの指定を受け、「生きる力」の育成を視野に入れながら、生徒が課題やねがいをもって、自ら学ぶ姿を大切に研究を継続してきた。これまでの研究の積み重ねから次の３点がわかってきた。

①　「わかる喜び」「自分で決めだし追究できた自信」を実感させることの必要性
②　個に応じた指導やドリル学習等で、基礎・基本を徹底することの大切さ
③　生徒の自己評価する力を高めていくことの大切さ

本年度は、まず生徒の自己評価に着目した。自己評価は、「わかった・できた」という喜びの実感、「ここはわかった」という確認、「ここがまだわからない」という認識、「次はこのようにしよう」という修正など、次への学習を発展させていく力となる。また、その自己評価を教師が把握することは、教師自身の指導の見返しと新たな指導を生み出す源となる。

こうした「自己評価」という視点を加えることで、生徒の学びの姿をとらえ直し、これを「自己学習力」とした。さらに、自己評価を生かした指導や２５分授業の導入等から、その育成を一層図ることを願い、主題を設定した。

Ⅲ　研究の概要

（１）研究推進体制の工夫

９教科会を３つの連合教科会にし、研究チームを編成した。月に２回、研究会を開き、研究主題実現のために、教材研究や授業改善のための話し合いを持った。また、各チームそれぞれに研究授業を計画し、そのための研究会も何回か設け、研究の実証としてその成果と課題が、日々の実践に生きるよう進めてきた。

さらに、研究推進委員会も設け、各チームの研究を推し進めたり、集約したりしながら、教科主任会とも協力して、より積極的に推進してきた。

（２）研究の実際

＜自己学習力を育てる自己評価を生かした指導＞　～自己評価カードの工夫～

・昨年度作成した評価規準を生徒にわかりやすいように表現を変え、学習の目標として自己評価カードに示した。

・１時間の授業で教師は本時のねらいに沿った評価をする。また、本時につけてほしい力は自己評価カードの目標のどれなのかをはっきりさせたうえで、関心・意欲・態度と共に自己評価させた。

・毎時間、カードは回収し、教師がコメントを加え、一人一人に寄り添った指導に心がけてきた。また、教師の評価と生徒の自己評価の違いに注目して、評価したことがその後の指導に生きるようにしている。

自己評価カード

３　方程式

組	番	氏名

＜学習の目標＞

数学的な見方や考え方
①　文字を用いると簡単な等式に表せることに気づき、その文字に当てはまる数について考えることができる。
②　等式の性質と移項の関係について考えることができる。
③　等式の性質をもとに方程式の解き方を考えることができる。
④　文章題で、方程式をつくってその解を求めることができ、解や解き方がよかったかどうか振り返って考えることができる。

表現・処理
①　方程式をつくることができる。
②　方程式に値を代入して、その数が解であるかどうか確かめることができる。
③　方程式を解くことができる。
④　方程式を解くとき、どの等式の性質が使われているのか説明することができる。
⑤　文章題で、方程式をつくったり、解を求めたりすることができる。

知識・理解
①　方程式及びその中の文字や解の意味について理解している。
②　等式の性質と移項の関係を理解している。
③　方程式の解き方を理解している。
④　方程式を利用して文章題を解決する手順を理解している。

＜５０分授業＞

月／日	学習を振り返って	関心意欲態度	先生
／		１２３４５ 学習の目標 評価	
月／日	学習を振り返って	関心意欲態度	先生
／		１２３４５ 学習の目標 評価	
月／日	学習を振り返って	関心意欲態度	先生
／		１２３４５ 学習の目標 評価	

＜２５分授業＞

月／日	関心意欲態度
／	１２３４５ 学習の目標 評価
月／日	関心意欲態度
／	１２３４５ 学習の目標 評価
月／日	関心意欲態度
／	１２３４５ 学習の目標 評価

＜１年生　・英語・数学への２５分授業の導入＞

２５分授業を取り入れたねらい

・週５日のうち４日、英語・数学の授業がまわってくる。従来の３日に比べると、前回の学習内容が記憶に新しいうちに、より継続性を持って学習することができる。
・１年生は、基礎的・基本的な内容を大切にしなくてはならない学年であることを考え、２５分という短い時間を使い、より集中して定着を図ることができる。

２５分授業の進め方

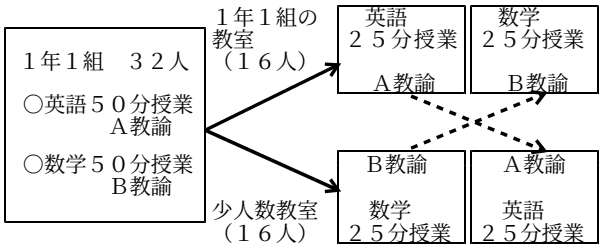
・英語・数学とも週当たり３時間の授業時数だが、そのうちの１時間を２５分授業２回分に当てる
・５０分授業の時は、クラス単位の普通の学習形態、２５分授業の時は、クラスを均質に半分に分けた少人数学習形態をとる。

	月	火	水	木	金
1				英語 50 分	
2			英数 25 分		
3				数学 50 分	英数 25 分
4	数学 50 分	英語 50 分			

＜週日課のとり方＞

５０分授業と２５分授業が交互に行われるように週日課を組んだ。２５分授業でよりきめ細やかに指導・評価したことを次の５０分授業に生かせるようにするためである。

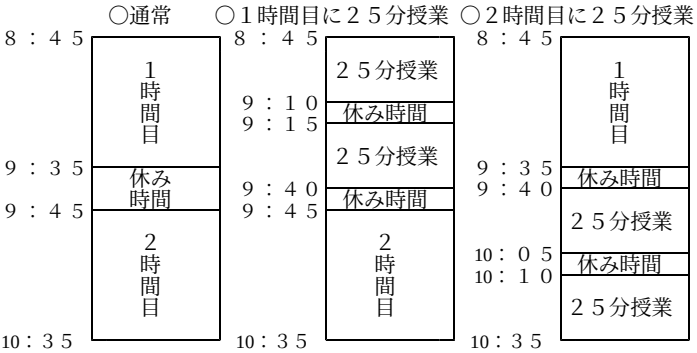
また、生徒の集中力を大切にした２５分授業は、可能な限り午前中になるようにも配慮した。



＜学習形態＞　　～１年１組の例～

均質に２つに分けられた生徒は、少人数教室と１年１組の教室の２つの教室に分かれる。そこで、英語科・数学科の教師がそれぞれの教室で１６人の生徒と授業を行い、２５分経ったところで教師が移動して入れ替わり、もう半分の１６人の生徒に基本的には同じ内容の授業を行う。

したがって、教科担任も複数かかわることなく、教師側から見ると受け持ちのクラスの生徒を２５分間でそれぞれ半分ずつ指導している。



＜日課表の工夫＞

１時間目の始まりと２時間目の終わり、同じように３時間目の始まりと４時間目の終わりは、合わせてチャイムを鳴らす。２５分授業は、５分前、あるいは５分後に時間をずらして、１０分の休み時間を５分ずつに分けることによって、位置づけた。したがって、１・２時間目の間、３．４時間目の間は、チャイムは鳴らない。

数学科での工夫

・５０分授業では、できる限り問題解決学習に取り組む。
・２５分授業は、５０分授業で行う終末段階での類似問題による定着の時間にあて、じっくりドリル的な学習に取り組む。
・２５分で、前時学習した内容を確認し、定着問題として、十数題を解き、答え合わせをして確認をした後に自己評価する。
・少人数の良さを活かし、個別指導の徹底を図っている。

英語科での工夫

・５０分授業では、新出事項の理解、発展的活動等、まとまった時間を必要とする学習に取り組む。
・２５分授業では、音読ステップを中心に行い、既習事項の定着を図っている。
・前時に学習した新出語句をワークシートを使って書き取りのドリルを行い、定着を図っている。
・少人数の良さを活かし、個別指導の徹底を図っている。

生徒の感想

・質問がしやすい　・発言機会が増えてよい　・先生がいつもよりよく見てくれる
・気持ちが楽　・短い時間で集中できてよい　・問題がたくさんできてよい　・わかりやすい

教師の評価

・短い時間でより集中して取り組める。　・基礎・基本の徹底を図るために有効である
・より個に応じた授業展開のあり方を追究していくことが大切

（３）研究の成果と課題

①２５分授業・自己評価カードを通してのＫ生の姿　（数学科）

月･日	コメント
9/8	真剣に取り組めた。 でも、$\frac{3}{2}\chi=12$　とか　$\frac{\chi}{2}=18$とか、分数の問題がわからない。
9/18	しっかり聞けたけど、やり方が確実でない。よくわからない。教えてください。
9/22	$\frac{2}{3}\chi+2=\frac{\chi-7}{4}$ のやり方がわかった。やり方になれると計算するのが楽しくなった。

等式の性質を使って、方程式を解くことを学習した。整数の範囲では、解くことができることを確認したＫ生であったが、自己評価にもあるように分数の問題は、まだ自信を持って解くことができなかった。

左記は、５０分授業の時の自己評価であるが、この間の２回の２５分授業で教師は、Ｋ生への個別指導の徹底を図った。

ドリル学習を積み重ねた結果、分数の問題の理解も進み、より難解な問題も解くことができ、わかる喜びを得ることができた。

②音読指導の効果　（英語科）

月･日	音読回数	コメント　Ｆ生
12/9	8	late の使い方がわかった。
12/13	7	発音がわかった。where ＋ is を忘れない。
12/16	5	しっかりノートがとれた。 whose の使い方がわかった。
12/20	１０	know のことがわかった。いっぱい読めた。

効果的な音読ステップを工夫し、２５分授業などで､音読指導の徹底を図ってきた。音読のステップを取り入れた授業の前と後で、どの程度まで単語知識の深まりが変わるかどうか､調べてみた｡テストの結果は、以下の通りである。

＜事前＞

平均　　３１３．０
標準偏差　　８１．２

＜事後＞

平均　　３３５．８
標準偏差　　７９．５

③上記２つの事例からもわかるように、２５分授業をうまく活用して、ドリル学習などを積み重ねることで、基礎・基本の徹底が図られてきている。しかし、形態の工夫にとどまることなく、その授業展開や個に寄り添った指導のあり方を研究していく必要がある。

また、本年度は自己評価に注目し、自己評価カードを工夫したわけであるが、自己学習力の育成を図るために、生徒の自己評価していく力を高めていくことが、今後の課題となる。

（４）研究成果の普及の方策

フロンティアスクールとして、１１月１１日に研究発表を行った。英語・数学の２教科の５０分授業と、本校独自の取り組みである英数の２５分授業も公開し、研究会を持った。

また、県外からの視察を積極的に受け入れ、本年度は、２回フロンティアスクールとして視察を受けた。今後は、こうした研究を他教科にも生かし、全教科公開につなげていきたい。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☐ １５年度からの新規校　☑ １４年度からの継続校

【学校規模】　☐ ３学級以下　☐ ４～６学級　☐ ７～９学級　☑ １０～１２学級　☐ １３～１５学級　☐ １６学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導　☐ その他

【研究教科】　☐ 国語　☐ 社会　☑ 数学　☐ 理科　☑ 外国語　☐ 音楽　☐ 美術　☐ 技術・家庭　☐ 保健体育　☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☐ 有　☑ 無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】